

「今、私の晴雨計は！(69)」

「人類滅亡のシナリオと

携帯の電話帳」

平山征夫

エッセイを書きはじめてのは古稀がキツカケだったから、早いもので五年になる。書いたエッセイも80編を超えた。そこで一つのけじめとしてこの三月末で一旦休止(中止?)しようと思っている。

あと二回としてテーマは何にしようか、どうかっこよく終わろうかと考え、「マイ・フェボライトソング&ラストソング」と「私の将来」というタイトルを考え、ラストソングの方を書きはじめて。それは3月14日に新

発田市文化団体連合会から依頼された文化講演会のタイトルでもあった。その背景には昨年同連合会から頼まれた生涯学習の講演の後の懇親会で、高齢化による機能劣化対策の話として菅原洋一さんから伝授して貰った発声法の話「初恋」を歌いながらしたのが印象に残ったように、今回の講演依頼に当たっては「第一部はお任せしますが、二部では平山さんと一緒に3、4曲一緒に歌うコーナーにした」との希望が出された。そこで「歌から学んだ生涯学習」という副題を付けて「マイ・フェボライトソング&ラストソング」というタイトルで講演することにし、我が人生で巡り合っ

た歌とそれになつわる忘れられない話を幾つか連ねるストーリーを創り始めた。そしてこの講演の反響を中心にエッセイを書こうと予定した。実はこの講演に来られる方々には「貴方が最も愛唱した歌と人生の最後に歌いたい歌は何ですか」というアンケートをお願いしていた。一緒に歌いたいという候補曲に「さくら貝の歌」忘れな草を貴方に」などが挙げられていたので、参加者年齢はほぼ私と同じくらいと考え、「人生最初の歌は、鐘の鳴る丘、さくらんぼ大将、ジロリタンタン物語など戦後ラジオから流れた子供向けドラマのテーマソングでした」から始まり、「青春時代には失恋の心を癒し

てくれた宵待草などの抒情歌の数々」などと筋立てをしていた。ところが2月29日の総理のイベント自粛、小中高休校要請が出されたのを受けて、この講演会は中止となってしまった。正直がっかりした。自分の人生を愛唱歌で振り返り、そこから学んだ宝ものような体験を、同じ時代を生きてきた皆に語って共有したかった。しかし今回の新型コロナウイルスはWHOによりパンデミックとされれば仕方ない。それにしても国家総動員法じゃあるまいし、卒業の別れをするとい間もなく全国一律休校措置というのは如何か、イベント休止には諦めが悪い。

人類がかかる感染症の半分は他の動物からうつったものだが、それと同じくらい人類から他の動物にもうつしているという。今回の感染症は蝙蝠と言われていたが、鼠が媒介と言われていたペストが最近になってミジラミが真犯人との報告が出されているからこれかどうか？症状が出ていなくても他人に感染させてしまうので始末が悪い。感染症の恐ろしさで思い出したのが、数年前旅行で訪れたアイスランド・レイキヤビクで見た黒死病の展示だ。飛んできた“Black Death”の単語は衝撃的だった。14世紀猛威を振るったペスト（黒死病）は致死率6〜9割と非常に高く、内出血で紫色にな

って死ぬことからこの名がついた。当時世界の人口は四億五〇〇万人、それがペストで一億人死んだ。流行の中心となったヨーロッパでは1/3の人口減が生じたのだから、正に人類絶滅の危機の恐怖だったろう。しかし、ハーバード大の中世史研究家のマイケル・マコーミック氏は、人類史上最大の危機は五三六年だったという報告を科学誌「サイエンス」にしている。その年、アイスランドで火山が噴火、火山灰が大気を覆い、18か月間世界は霧に包まれた。その影響で気温は1.5〜2.5度も地球規模で低下、干ばつや飢饉が大規模に発生、人類は生き延びるのに困難をきたしたが、五

四一年のペストの大流行がそれに追い打ちを掛けた。その結果、東ローマ帝国の人口の半分近くが命を落とし、ユスティニアヌスの東ローマ帝国の滅亡が早まったという。こんなことを考えていて思い出して探し出してきたのが「人類滅亡ハンドブック」なる本。著者はアローク・ジャーンというジャーナリスト、作家でテレビニュースの科学記者も務めている人。宗教上の終末思想も含めて、人々は昔から地球ないし人類滅亡におののいてきた。その可能性を科学的に考察したのが本著、目次に掲げられた滅亡シナリオの多さにまず驚いた。挙げてみよう。

大絶滅（生命自体が原因）、パンデミック（豚・鳥インフルエンザ）、核兵器戦争、相互確証破壊（MAD）、テロリズム、薬物による幸福、人口爆発、人口減のデス・スパイラル、サイバー戦争、バイオテクノロジーの暴走、ナノテクノロジーの暴走、人工超知性、超人間主義、ハチの大量死、外来侵入種、地球の砂漠化、地球規模の食糧危機、水争奪戦争、資源の枯渇、環境崩壊、海面上昇、メキシコ湾流の遮断、全球凍結、化学汚染、オゾン層の破壊、小惑星の衝突、超火山、メガ津波、酸素欠乏、地磁気の逆転、スーパーストーム、太陽嵐、ポ

ールシフト、死の宇宙塵、暴走するブラックホール、宇宙ガンマ線、真空崩壊、太陽の衝突、科学者のつくりだすブラックホール、敵意のある異星人、太陽の死、銀河の衝突、時間の終わり、ストレンジレット、遺伝子超人、劣性学、有機細胞の崩壊、情報の絶滅、未知の未知

次にこれだけある人類絶滅メニューのうち、正確にそのリスクを理解しているものが少ないことに驚いた。加えて現在最大の課題となっているパンデミックについても、気候変動や人口爆発、食糧問題、核兵器の脅威など程、意識していなかったことにも気づかされた。あれだけ頻繁にイ

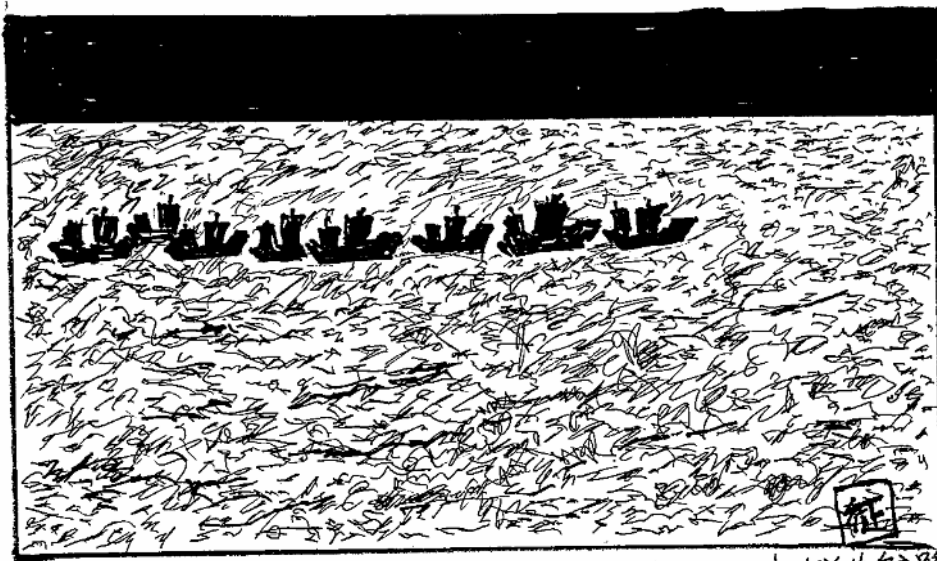
ンフルエンザの大流行を経験してきたながら、流行性感冒、すなわち流行り風邪としか思っていない。しかし、本著のパンデミックの項に記述されていた王立ロンドン医科歯科大学ジョン・オックスフォード教授の「インフルエンザは20世紀最大の大量破壊兵器でした。なにしろナチスドイツよりも、原爆よりも、第一次世界大戦よりも多くの死者を出しているのです」、さらに「ウイルスは我々の世界で最大の「バイオテロリスト」です。公衆衛生のための努力は、これからますます広げてゆくべきでしょう。いつ新たなウイルスが出現し、一九一八年の大流行以上に素早く、簡単に我々を参

らせてしまったとしても、まったく不思議はないという指摘は衝撃だった。一九一八年、第一次大戦の末期に世界にあつという間に広がったスペイン風邪は、五〇〇〇万人から一億人の死者を出したという。場合によっては人類史上最大の死者を出したパンデミックだったかもしれないと言われる。この大流行でアポリエール、クリムト、エゴン・シーレ、マックス・ウエーバー、村山槐多、島村抱月、辰野金吾（日銀本館の設計者）など多くの才能が失われた。

鳥と豚が保有しているウイルスに依る可能性が極めて高いのだから、発生する前からそれらウイルスの研究をもっとしておくべき」との指摘も大いに傾聴すべきだろう。そしてこのハンドブックで挙げられた人類滅亡シナリオのうち地球物理学的要因や大規模災害（温暖化が原因の分は除外だが…）による不可避のものは仕方ないとして、核兵器や原発、AIロボ戦争など人類の文明が行きすぎた結果起こる滅亡だけは避けたいと熱望している。カミュの「ペスト」が急に売れだし、書店では品切れという。しっかりしない政府より七〇年前に書かれた本のほうが頼りになるかもしれない。

こんなことを考えているうち、私と同じ糖尿病持ちのTのことが想い出された。慎重な性格だから家に閉じこもっているだろうが大丈夫か心配になって電話した。閉じこもってはいたが元気がだった。ただ、そのためにくくった携帯の電話帳には、番号だけが残った友の名がやけに目について仕方なかった。掛けることのない電話番号、でも消去する気にはなれない。いずれ自分の番号もそんな存在になるのだ。そう思いながら電話帳を眺めていたら、パンデミックも人類滅亡もどうでもよくなってしまった。

(令和2年3月26日)



航路の人生